
幸せの回数券

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの回数券

【著者名】

ZZマーク

N7738E

【作者名】

雪場

【あらすじ】

とある初夏の日の物語。平和ですが…短めです。

軒先にぶら下げた風鈴が、チリンと涼しげな音を響かせて揺れる。遠くに蝉の声を聞きながら、遠山和葉は畳の上に仰向けに寝つ転がっていた。

大阪の夏には珍しく、湿度は低く、ねどりとまとわりつくような嫌な感じはない。

時たま頬をなでていく乾いた風のせいで、体感温度はかなり低めだ。

「幸せやなあ」

和葉がそつそつと、頭のまづから「んっ」と返事が戻ってくる。

服部平次もまた、畳を背に夏の午後を過いでいる。

「幸せ使つてしまつの、やめとこつかな」

天井の木目を指で追いながら、和葉がひとりじみつに畳へ。

平次が体を起こした。

体を反転させて、両肘でいごを支える。

「なんや?」

「だつて」

そこで和葉は木目をなぞる指を止める。顔は天井に向けたまま、流し眼で平次の顔を見つめた。

「『一生分の幸せ』とかよく言つたが、こんな風に過りしどとしたら、すぐなくなつてしまいやん」

そう言いながらも、和葉の口元は笑っている。それを見て、平次の口角も無意識に上がる。

「アホ」

和葉の頭の上に、ポン、と手を置く。

「確かに幸せちゅうつーのは、回数券みたいなもんかもしねへん。使える回数の限りのあるやつ……。せやけど、タダの回数券とひやつ。ポイントがついてくるんや」

「ポイント？」

怪訝そうな顔で和葉が問い合わせる。

「せや。使えば使つほどポイントがたまつてつてな、ポイントを集めると新しい回数券がもらえんねん。だつて言つやう」

そこで一度、言葉を切る。

身を乗り出して、和葉の顔を上から覗き込む。

「『笑つ門』には、福来る』ってな

一瞬あっけに取られたような和葉の表情が一気に崩れ、笑い顔へと変わっていく。

「なんや、オレは真剣やぞ」

平次がわざと撫然とした表情をつくつてそう言った頃には、和葉は声をあげて笑っていた。

笑いながらうなずき、和葉が訊いた。

「せやつたり、今は……」

今度は平次がうなずく番だった。

「幸せのバーゲンセール、ゆづといふかな」

そういうふとまた仰向けに、和葉の隣に寝つ転がる。

「ほり、早よ回数券使つて、新しいのもひつとけや」

こいつとほほ笑むと、つなぎいて和葉は目を閉じる。

もう一度、風鈴がチリンと鳴る。

大阪の夏は、まだ始まつたばかり。

(後書き)

お久しぶりです、いや、はじめましての方も多くいらっしゃるかもしだせん、雪場と申します。

鬼のように忙しい一学期が無事終了いたしましたので、リハビリも兼ねて短編を書いたわけですが…短さ70%、甘さ30%アップ（当社比）の代物になってしまいました（笑）。

夏休み期間は執筆に精を出したいところですが、9月にまたテストが待つていらっしゃるのでどうなる事やら（汗）。

気長に見守つていただけると幸いです。それでは、乱文失礼いたしました。今後ともよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7738e/>

幸せの回数券

2010年12月20日04時48分発行